

祭りで継承 志賀「福浦御船歌」

将軍の船出歌ルーツか

志賀町福浦港の町無形民俗文化財「福浦祭り」で歌われる「福浦御船歌」は、江戸幕府の将軍や藩主の船出時の歌から伝承したとみられることが16日まで、加能民俗の会の西山郷史副会長＝珠洲市飯田町＝の調査で分かった。一般的船頭歌や綱引き歌などの「船歌」とは全くの別系統で、日本海側の港では珍しい謡曲「今様」の流れをくむ御船歌が、受け継がれていた。



加賀藩通じ能登へ

西山副会長は以前から、輪島市や七尾市、穴水町で受け継がれる「まだら」など能登の民謡に、将軍の船出の際の歌「御座船歌」のクライマックス「めでためでたの若松様よ 枝も栄える 葉も茂る」の締め部分のみが受け継がれていると指摘していた。今回、「福浦御船歌」には、他の能登の民謡にない船造りの神話を伝える歌詞があり、御船歌のクライマックスを

加能民俗の会

西山副会長が調査

迎える前の部分も残されていることを突き止めた。御船歌は江戸幕府から各藩に伝習され、幕府や各藩の新造船の進水、藩主の船出など儀礼、船で参勤交代した広島藩など西日本の諸藩で歌われた。最初に音頭取りが歌い、ほかの歌方が3拍子の櫓を漕ぐ調子で唱和しながら歌い継ぐことで、一糸乱れぬ操船を徹底する狙いがあったとされる。

神輿を神船に載せて海上渡御し、「福浦御船歌」が歌われる福浦祭り
＝昨年8月、志賀町福浦港

「加能郷土辞彙」には、加賀藩祖前田利家の頃に藩有船舶を係留した宮腰（現金沢市金石地区）に御船小屋が置かれ、5代藩主綱紀の頃の1678（延宝6）年に江戸で、音頭を取る「歌頭」3人を雇ったことが記されている。

西山副会長は「加賀藩で

操船などを担った船手足輕が所属した御船小屋を通じて、御船歌が祝い歌として能登にも広がったのだらう」と話した。